

3. 定点把握対象感染症患者報告状況（週報）

(1) 過去5年間の報告状況

| 疾患名 | 平成 25 年 | 平成 26 年 | 平成 27 年 | 平成 28 年 | 平成 29 年 |
|------------------------------|---------|---------|---------|---------|---------|
| インフルエンザ | 8,409 | 9,668 | 8,574 | 9,808 | 10,178 |
| RS ウイルス感染症 | 1,861 | 1,838 | 1,679 | 1,976 | 2,044 |
| 咽頭結膜熱 | 285 | 582 | 453 | 448 | 718 |
| A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 | 1,121 | 894 | 1,418 | 1,347 | 2,229 |
| 感染性胃腸炎 | 8,820 | 7,894 | 7,411 | 9,708 | 6,737 |
| 水痘 | 1,101 | 889 | 544 | 300 | 352 |
| 手足口病 | 1,574 | 184 | 4,191 | 332 | 2,041 |
| 伝染性紅斑 | 19 | 47 | 197 | 343 | 92 |
| 突発性発しん | 959 | 934 | 862 | 798 | 858 |
| 百日咳 | 10 | 25 | 17 | 30 | 11 |
| ヘルパンギーナ | 1,056 | 911 | 428 | 876 | 687 |
| 流行性耳下腺炎 | 193 | 51 | 179 | 1,399 | 817 |
| 急性出血性結膜炎 | 1 | — | — | 1 | 1 |
| 流行性角結膜炎 | 22 | 15 | 23 | 30 | 43 |
| 細菌性髄膜炎 | 3 | 1 | 3 | 2 | — |
| 無菌性髄膜炎 | 9 | 1 | 3 | 3 | 2 |
| マイコプラズマ肺炎 | 17 | 26 | 43 | 57 | 13 |
| クラミジア肺炎 | 3 | — | — | 1 | — |
| 感染性胃腸炎(ロタウイルス) ¹⁾ | 1 | 32 | 40 | 58 | 12 |

¹⁾ 平成 25 年 10 月 14 日より定点把握対象感染症に指定された。

(2) 各疾病の報告状況

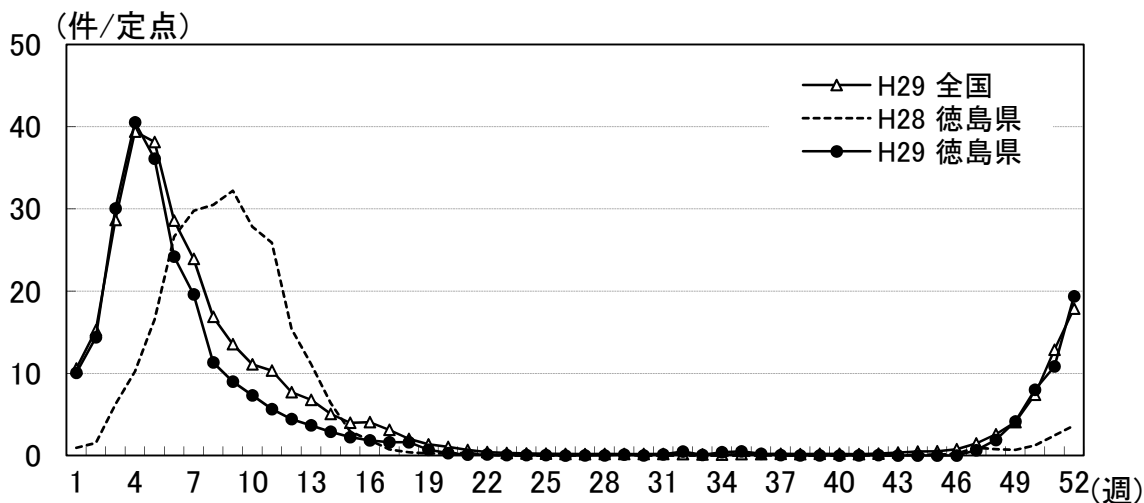
① インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）

年間報告数は10,178件であり、前年（9,808件）よりやや増加した。

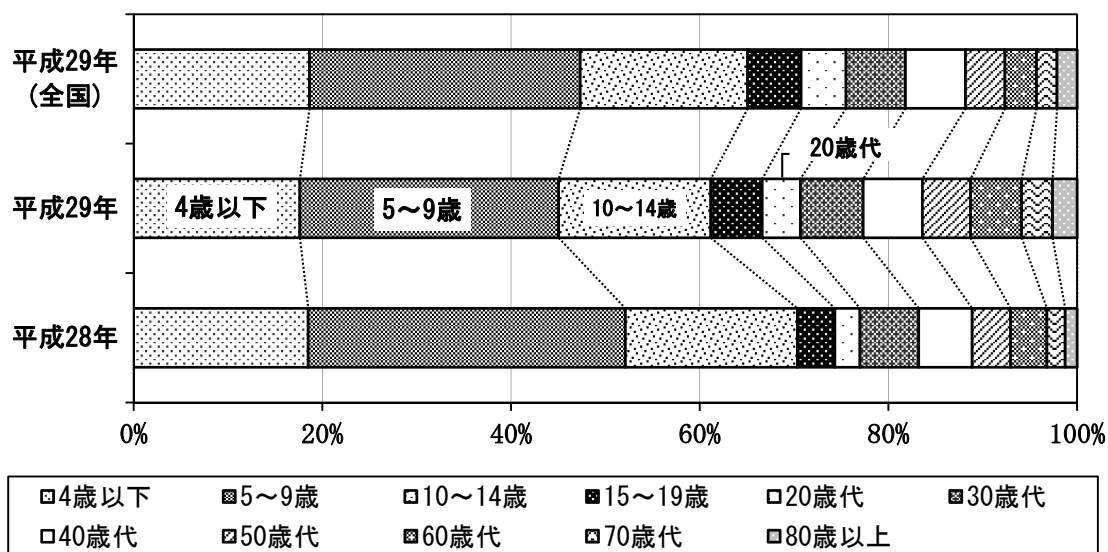
本年の前期流行は、例年とほぼ同じ第50週に流行期入りした後、6週連続で報告数が増加しピーク（40.5件/定点）を迎えた。ピークの高さは前年（32.2件/定点）より高かったものの、報告数が注意報レベル（10件/定点）を超えた期間（第1～8週）は、前年（第4～13週）と比べ短かった。後期流行については、前年より約2週早い第48週に流行開始の目安とされる1.0件/定点を超え、流行シーズンを迎えた。

年齢層別報告数では、4歳以下17.6%、5～9歳27.4%、10～14歳16.1%、15～19歳5.5%、20歳以上33.4%であり、前年と比較して5～9歳の割合が低く、20歳以上の割合が高かった。

インフルエンザの週別患者報告状況



インフルエンザの年齢層別報告数



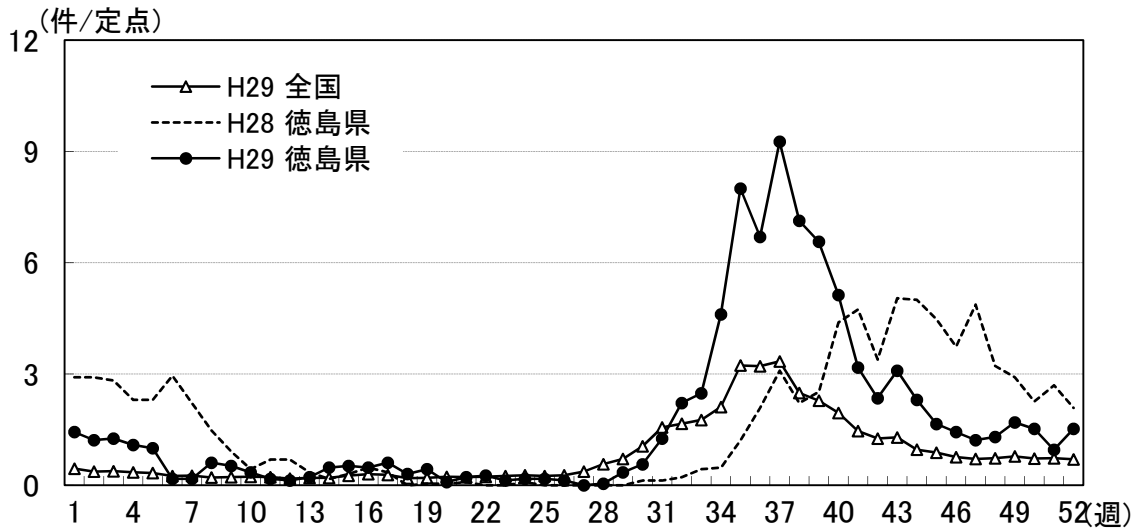
② RS ウイルス感染症

年間報告数は2,044件であり、前年(1,976件)よりやや増加した。

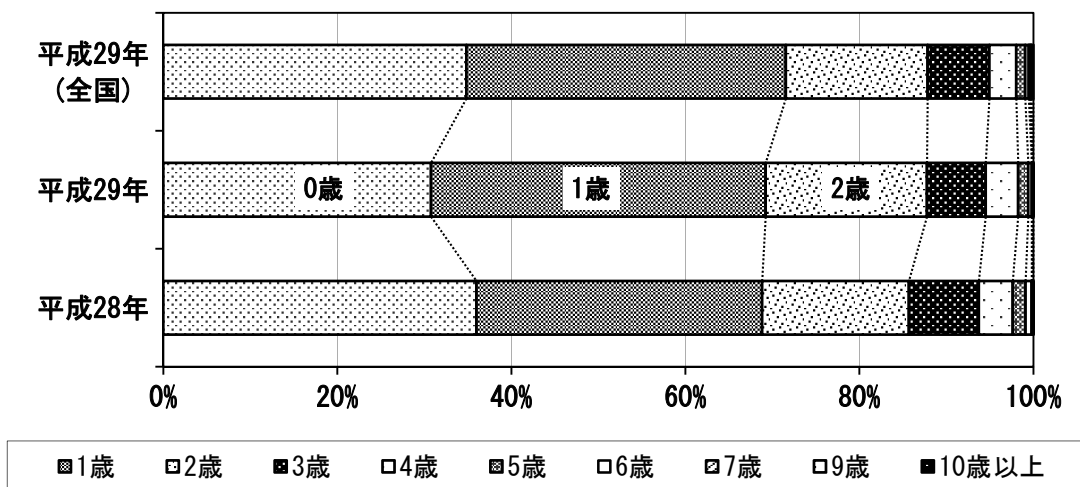
本疾患の流行パターンは、季節性インフルエンザに先行する初秋頃より患者数が増加し始め、冬にピークを示すことが多い。本年の前期流行は、前年の後期流行を継続したまま、第5週まで報告数の高い状態が続いた。後期流行は、例年より約2ヶ月程度早い第30週頃(7月下旬)より報告数が増加し始め、第33週以後急増しピーク(第39週:9.3件/定点)を示した。以降、報告数は減少したものの流行期間は長く、全国を上回る報告数のまま越年した。

本疾患は2歳までの乳幼児からの報告が多く、本年の年齢層別報告数でも、0歳30.8%、1歳38.5%、2歳18.5%、3歳6.8%、4歳以上5.4%であり、前年と同様に2歳以下の乳幼児の割合が大半(約88%)を占めた。

RS ウイルス感染症の週別患者報告状況



RS ウイルス感染症の年齢層別報告数



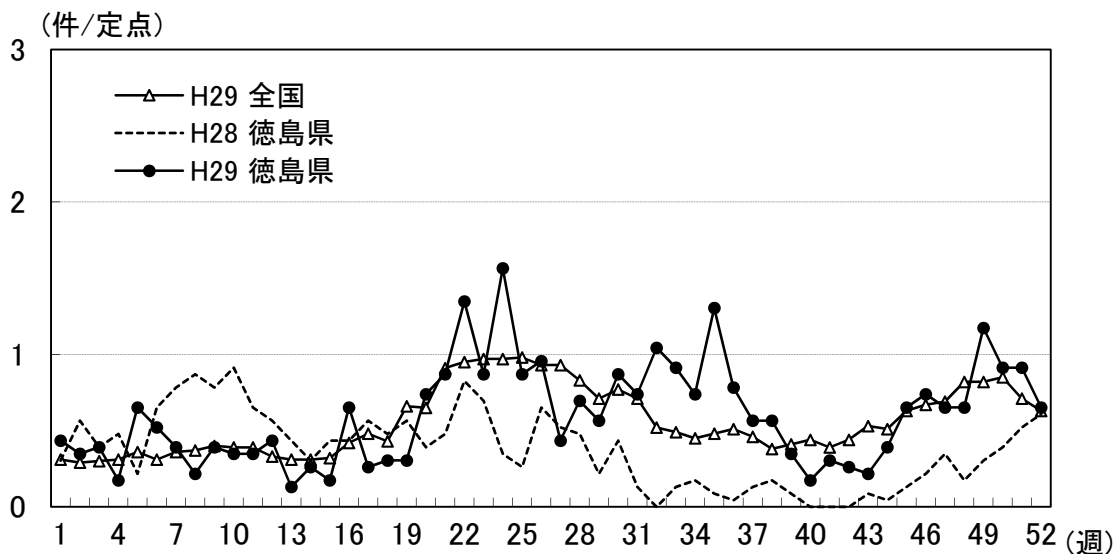
③ 咽頭結膜熱

年間報告数は718件であり、前年(448件)の約1.6倍に増加した。

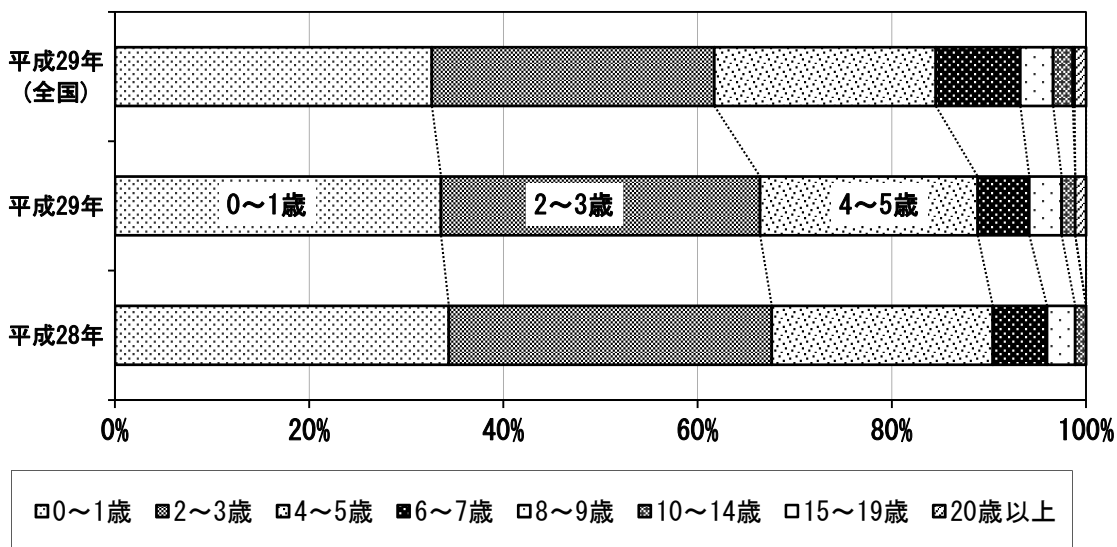
本疾患の流行パターンは、4月ごろから報告数が増加し始め、7～8月にピークを示した後、秋にも小規模な流行が見られる年もあるとされる。本年も4月下旬頃より報告数が増加し始め、第24週にピーク(1.57件/定点)を示した。以降、やや減少したものの例年と比べ高く推移し、県内一部の地域での地域流行等により第35週と第49週に小さなピークが見られるなど、報告数の高いまま越年した。

本疾患は一般的に4歳以下の乳幼児からの報告が多く、本年の年齢層別報告数も、1歳以下33.6%、2～3歳32.9%、4～5歳22.4%、6～7歳5.3%、8歳以上5.8%であり、5歳以下が約89%を占めた。

咽頭結膜熱の週別患者報告状況



咽頭結膜熱の年齢層別報告数



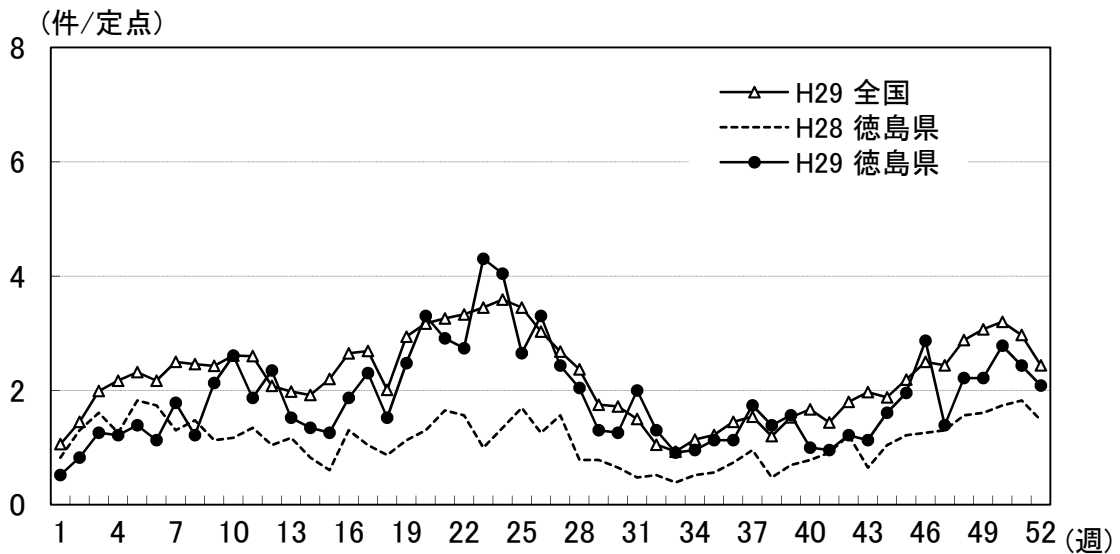
④ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

年間報告数は2,229件であり、前年(1,347件)の約1.7倍に増加した。

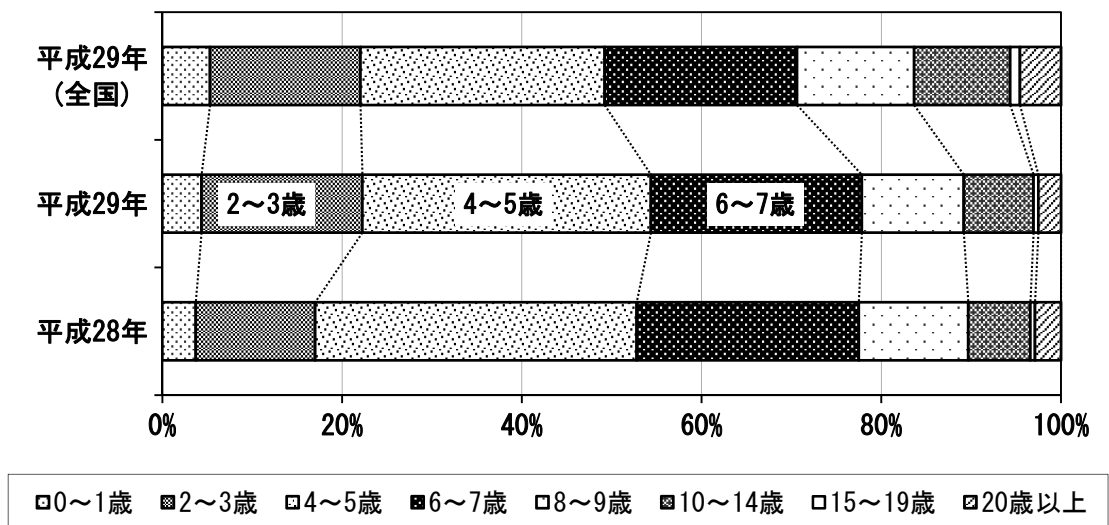
本疾患は、冬季及び春から初夏にかけて報告数が増加するとされる。本年も、年当初からゆるやかに増加し、第23週(6月初旬)にピーク(4.3件/定点)が見られた。その後、減少したものの第43週頃より再び増加傾向を示すなど、流行が見られなかった前年、前々年と比べ、年間を通して報告数の高い状態が続いた。

本疾患はいずれの年齢層からも報告されるが、学童期小児からの報告が多いとされる。本年の年齢層別の報告数も、0~1歳4.4%、2~3歳17.9%、4~5歳32.1%、6~7歳23.5%、8~9歳11.4%、10~14歳7.8%、15歳以上3.0%と、学童期小児の割合が高かった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の週別患者報告状況



A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の年齢層別報告数



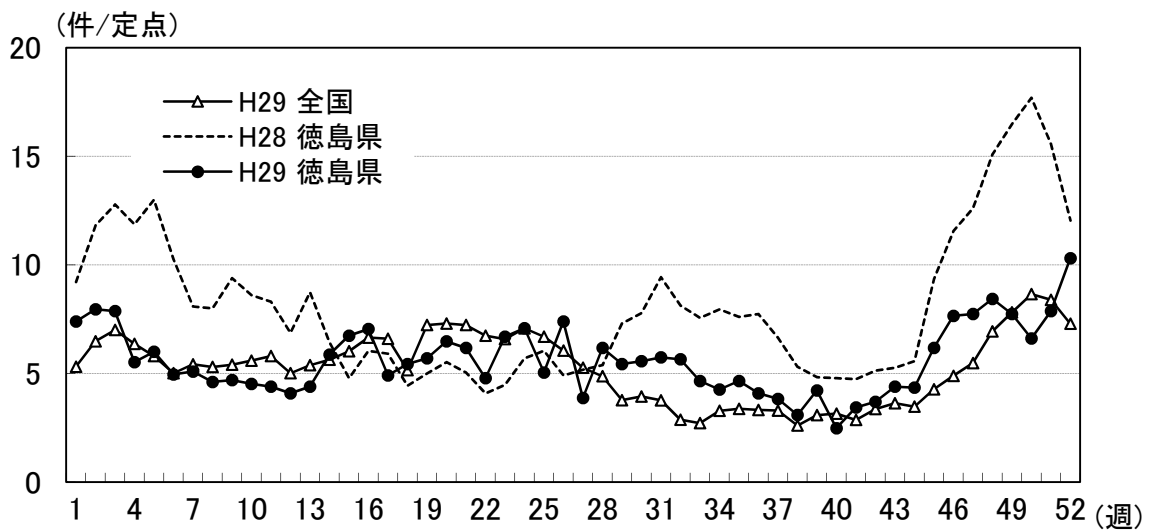
⑤ 感染性胃腸炎

年間報告数は6,737件であり、前年(9,708件)から大きく減少し、過去5年間で最も少なかった。

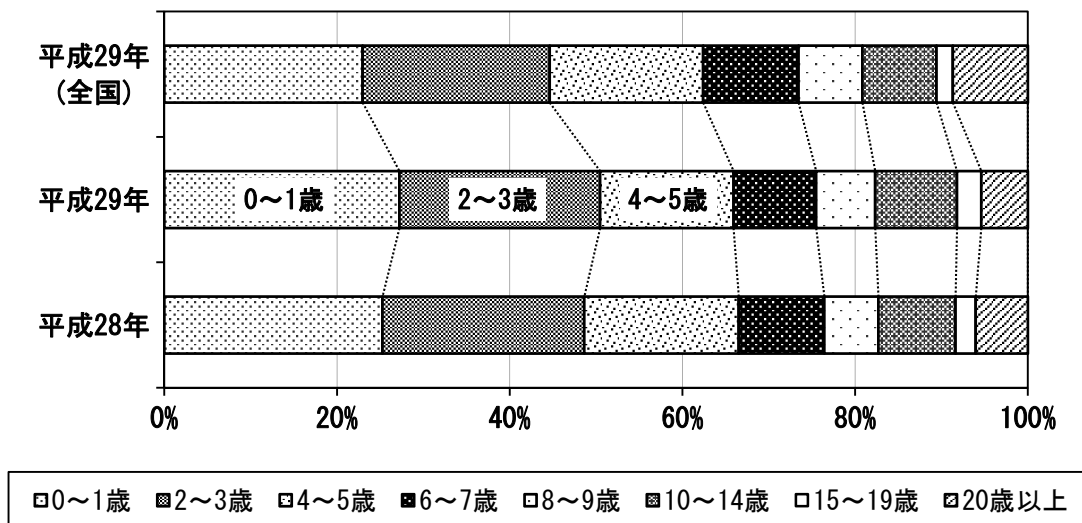
本疾患の流行パターンは、初冬から増加し始め、12～1月頃に一度ピークが見られた後、春にもう一つなだらかなピークを示すことが多い。本年の前期流行は、前年の後期流行に続き第3週頃までは報告数が多かったものの、以降は緩やかに減少した。後期流行は、例年より約2週間程度早い10月中旬(第40週)から報告数が増加し始め、前年の後期流行のようなピークはみられなかったが、増加傾向を示したまま越年した。

年齢層別報告数は、0～1歳27.2%、2～3歳23.2%、4～5歳15.5%、6～7歳9.6%、8～9歳6.8%、10～14歳9.5%、15歳以上8.2%と5歳以下の乳幼児が全体の約66%を占めた。

感染性胃腸炎の週別患者報告状況



感染性胃腸炎の年齢層別報告数



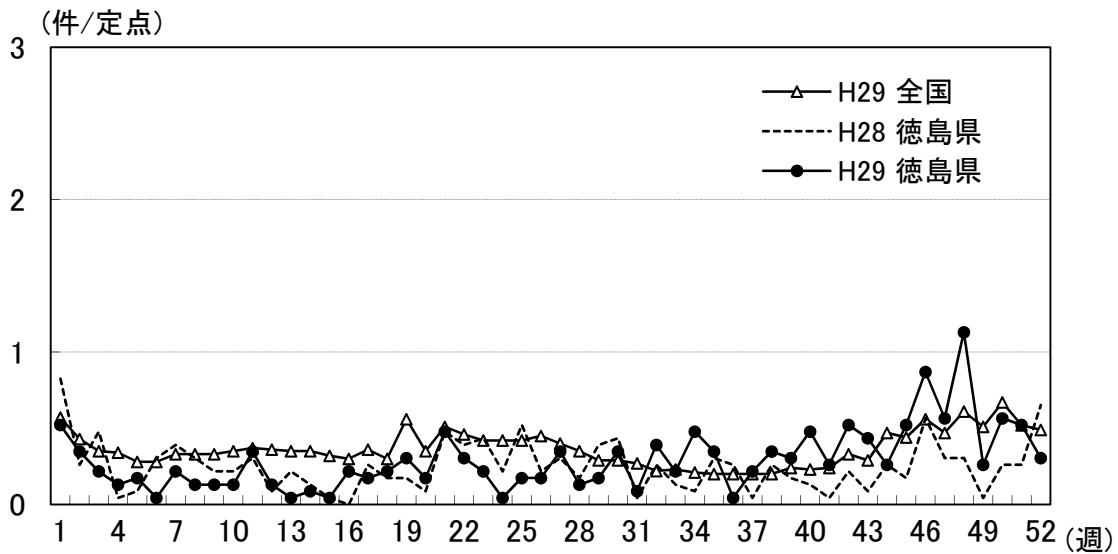
⑥ 水痘

年間報告数は平成 25 年以降 4 年続けて減少していたが、本年は 352 件と、前年（300 件）からやや増加した。

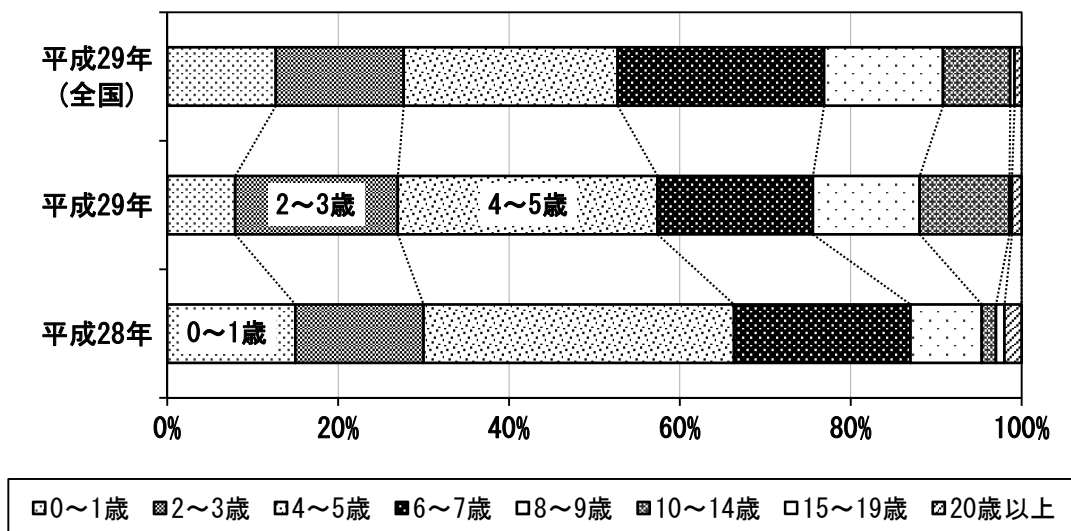
本疾患は年間を通して発生するが、主に冬から春にかけて流行し、夏から初秋は減少するとされる。本年も年間を通して報告され、11 月下旬には県内一部の地域において地域流行がみられたものの明確なピークは見られず、年間を通じて低い報告数（1.0 件／定点以下）のまま推移した。

年齢層別報告数では、0～1 歳 8.0%、2～3 歳 19.0%、4～5 歳 30.4%、6～7 歳 18.2%、8 歳以上 24.4% と 7 歳以下の報告が全体の約 76% を占めた。

水痘の週別患者報告状況



水痘の年齢層別報告数



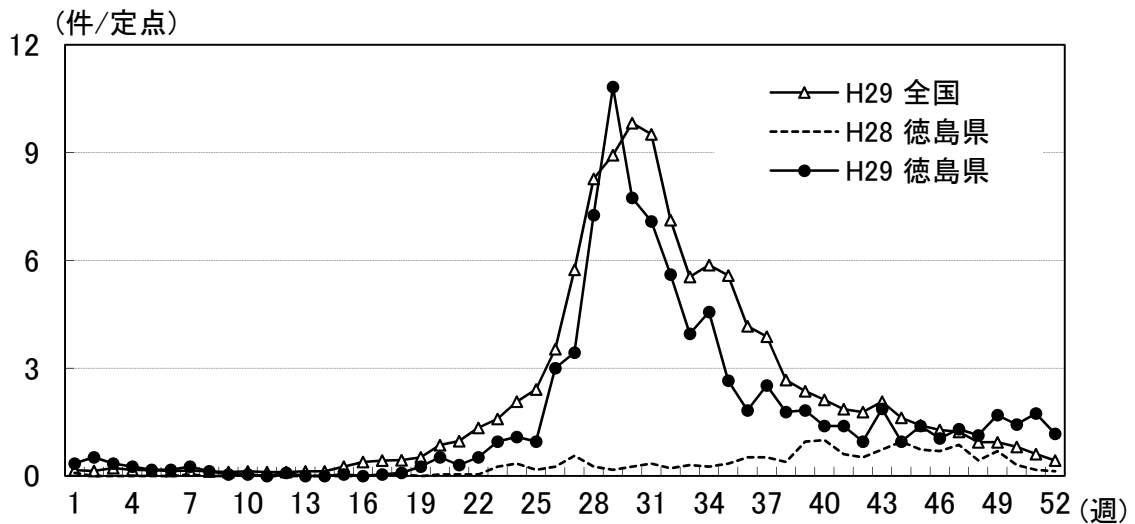
⑦ 手足口病

年間報告数は2,041件と、流行が見られなかった前年(332件)の約6倍に増加した。過去5年間では、平成25年(1,574件)、27年(4,191件)と1年おきに流行が見られている。

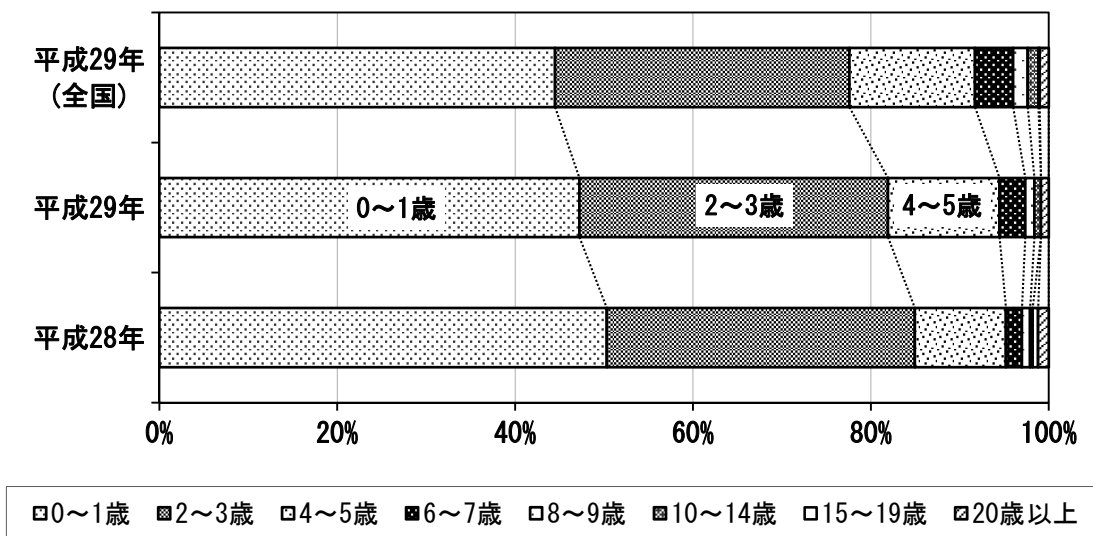
本疾患は夏に流行する代表的な感染症であり、例年7～8月にピークを迎える。本年も、5月下旬頃より報告数が増加し始め、第25週から急増し、第29週(7月中旬)にピーク(10.8件/定点)が見られた後、緩やかに減少した。年間を通して低い報告数(1.0件/定点以下)で推移した前年と比べ、6月中旬から10月下旬頃までの長い期間、流行が続いた。

年齢層別報告数において、例年、5歳以下の乳幼児からの報告が9割を占めているが、本年も、0～1歳47.2%、2～3歳34.7%、4～5歳12.5%、6～7歳2.9%、8歳以上2.6%であり、5歳以下からの報告が全体の約94%を占めた。

手足口病の週別患者報告状況



手足口病の年齢層別報告数



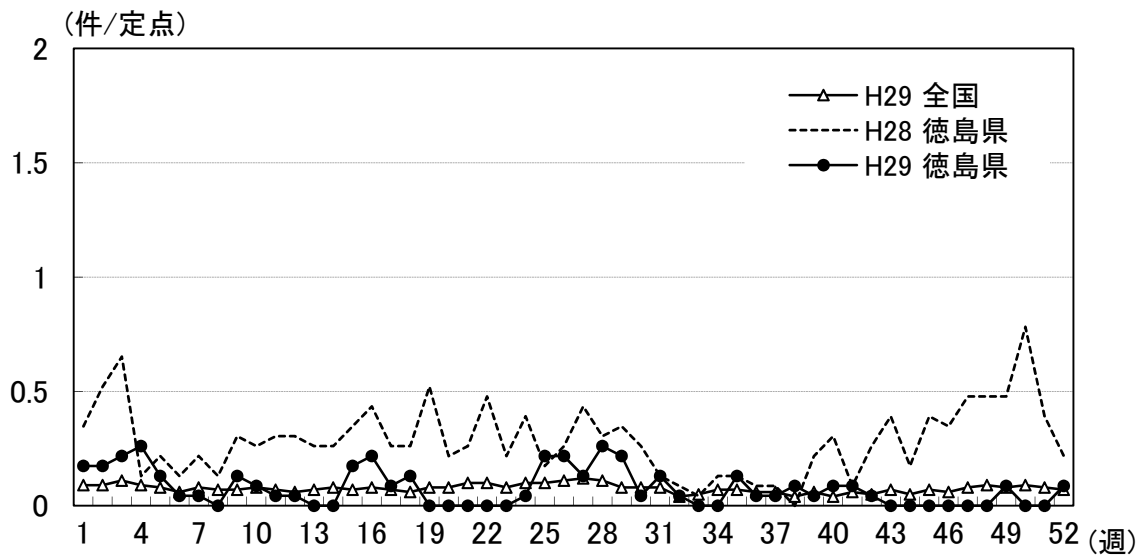
⑧ 伝染性紅斑

年間報告数は92件と、前年(343件)から大きく減少した。過去5年間の報告数の推移では、19~343件と年毎により報告数の変化が大きい。

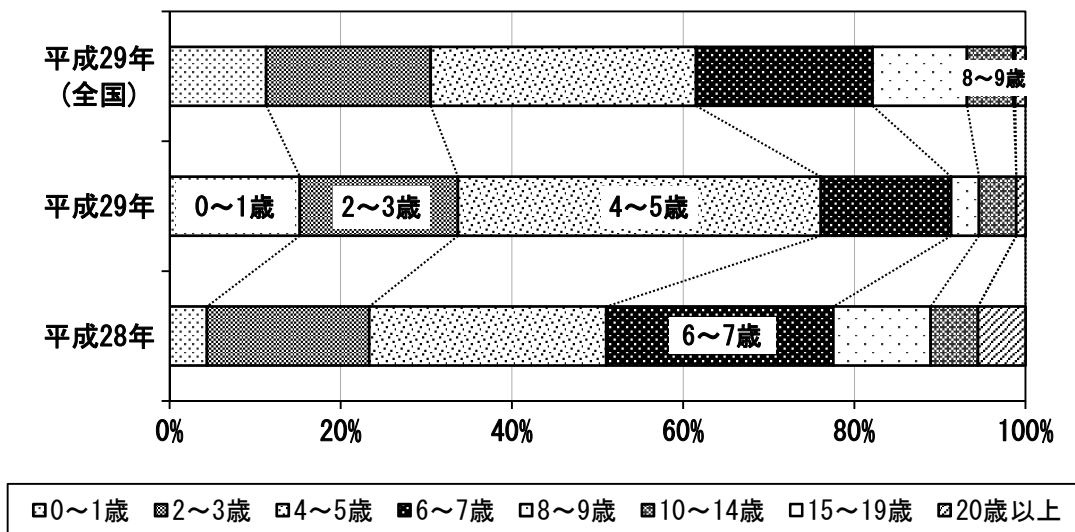
本疾患は、年始頃より7月上旬にかけて増加するが、流行の小さい年は季節性が見られないことが多い。本年も年間を通し、多少の増減を繰り返しながら0.26件/定点以下の低値で推移した。ピークや季節的な変動も示さず、地域流行も見られなかった。

年齢層別報告数では、0~1歳15.2%、2~3歳18.5%、4~5歳42.4%、6~7歳15.2%、8~9歳3.3%、10歳以上5.4%と、2~7歳の幼少児での割合が高かった。

伝染性紅斑の週別患者報告状況



伝染性紅斑の年齢層別報告数



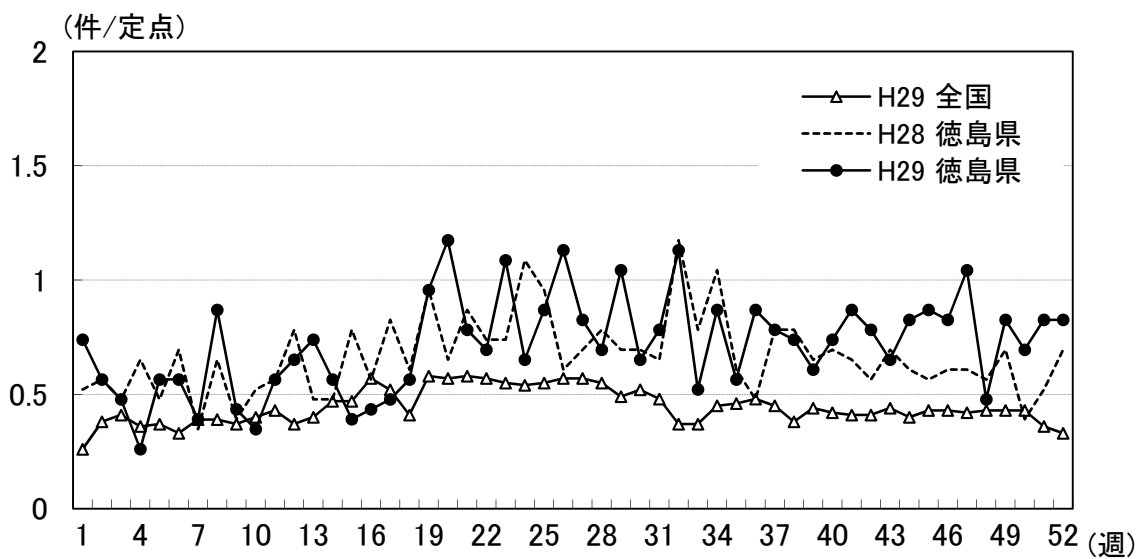
⑨ 突発性発しん

年間報告数は858件であり、前年(798件)からやや増加した。

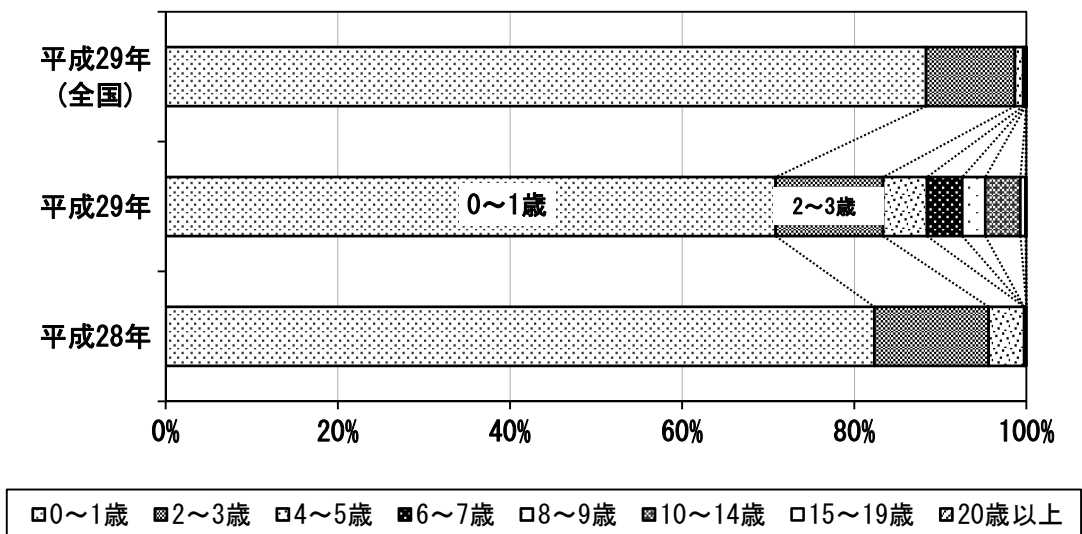
本疾患は、季節性も年次推移も認められず、年間を通じてほぼ一定の範囲内をスパイク状の増減を繰り返しながら推移するとされる。本年もピークは示さず、大きな季節的変動も見られないまま、報告数は一定の範囲内(0.3~1.2件/定点)で推移した。

年齢別では6カ月~1歳代の小児に好発し、ほとんどの子どもが3歳までに感染するといわれている。本年も0~1歳70.9%、2~3歳12.5%、4~5歳5.1%、6歳以上11.6%と、1歳以下が最も多く報告され、3歳以下で大半(約83%)を占めた。

突発性発しんの週別患者報告状況



突発性発しんの年齢層別報告数



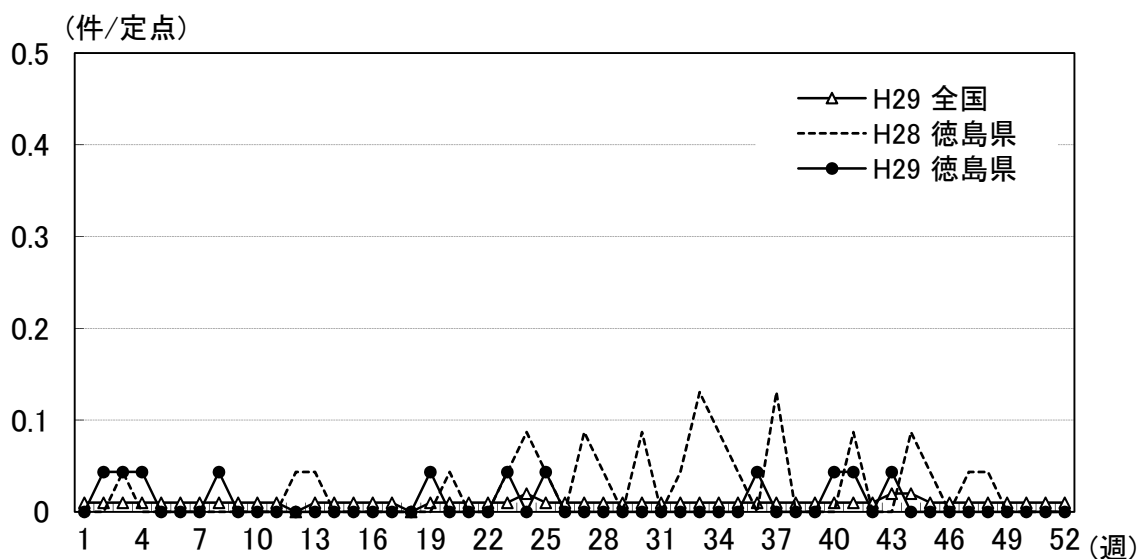
⑩ 百日咳

年間報告数は11件と、前年(30件)から減少した。過去5年間の報告数は、毎年10~30件で推移している。

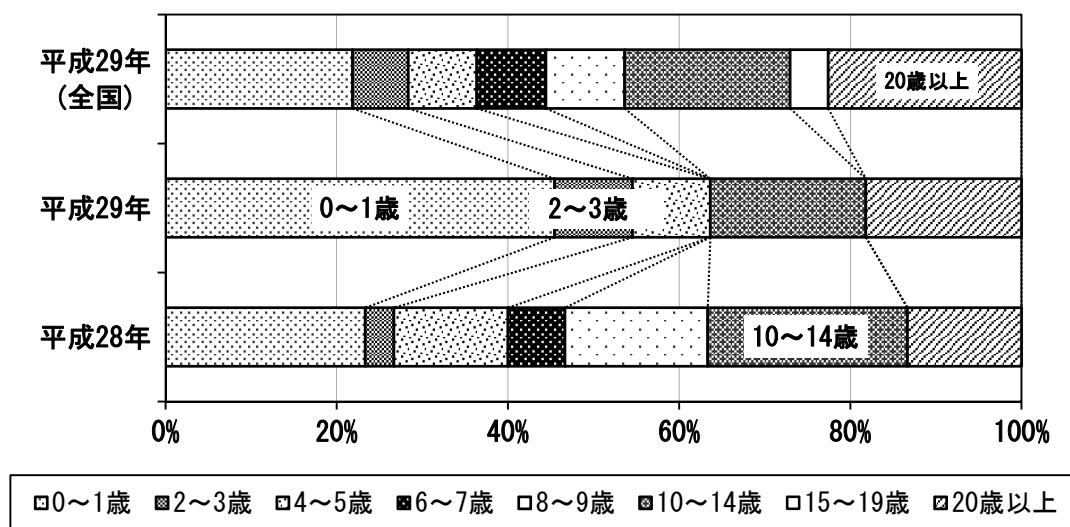
本年も昨年同様、季節的变化は見られず、報告数は一定の範囲内(0~0.04件/定点)で推移した。

年齢層別報告数では、0~1歳45.5%、2~3歳9.1%、4~5歳9.1%、10~14歳18.2%、20歳以上18.2%であった。報告数が少ないため単純に比較することはできないが、前年と比べ3歳以下の乳幼児の割合が増加していた。

百日咳の週別患者報告状況



百日咳の年齢層別報告数



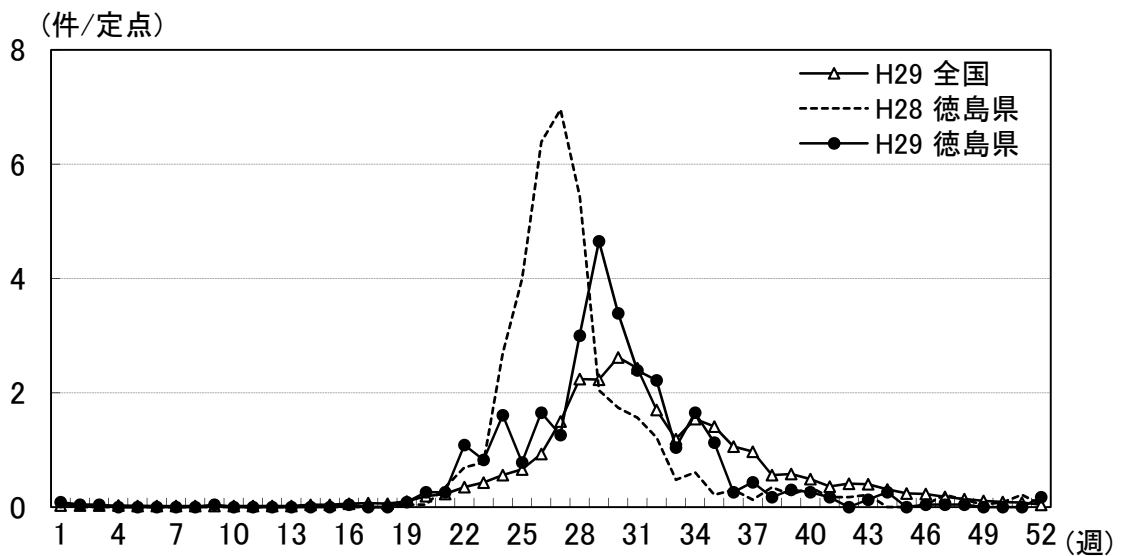
⑪ ヘルパンギーナ

年間報告数は687件と、前年(876件)から減少した。過去5年間の報告数の推移では、428～1,056件と、流行の大きかった年と小さかった年では約2倍以上報告数が増減している。

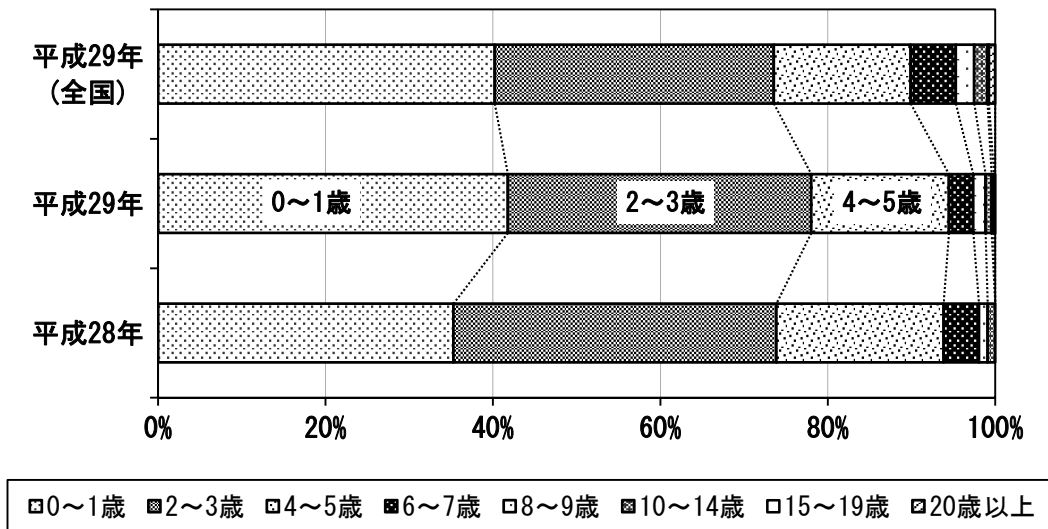
本疾患は、手足口病とともに主に乳幼児の間で流行する夏季の代表的な感染症である。本年は、6月初旬(第22週頃)より報告数が増加し始めたものの増加は緩やかで、前年より約2週間遅くピーク(第29週4.7件/定点)を示した。前年と比べピークは低く、流行期間もやや短かった。

年齢層別報告数では、5歳以下が大半を占め、1歳代がもっとも多いといわれている。本年も、1歳以下41.8%、2～3歳36.2%、4～5歳16.4%、6～7歳2.9%、8歳以上2.6%であり、5歳以下の乳幼児が約94%を占めた。

ヘルパンギーナの週別患者報告状況



ヘルパンギーナの年齢層別報告数



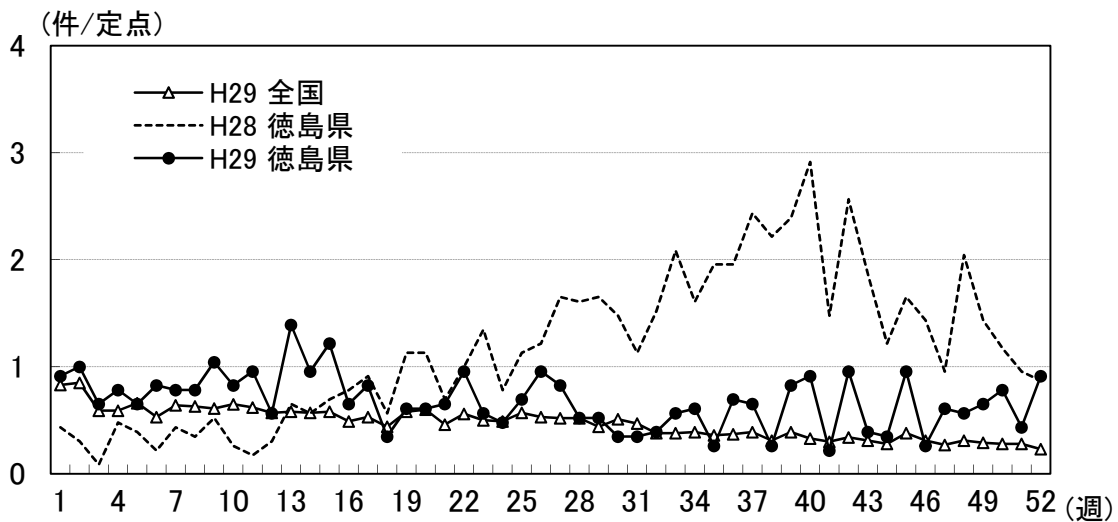
⑫ 流行性耳下腺炎

年間報告数は817件と、平成23年以来6年ぶりの流行年となった前年(1,399件)から減少した。過去10年間では平成17～18年、平成22～23年と、数年おきに2年続けて大きな流行が見られている。

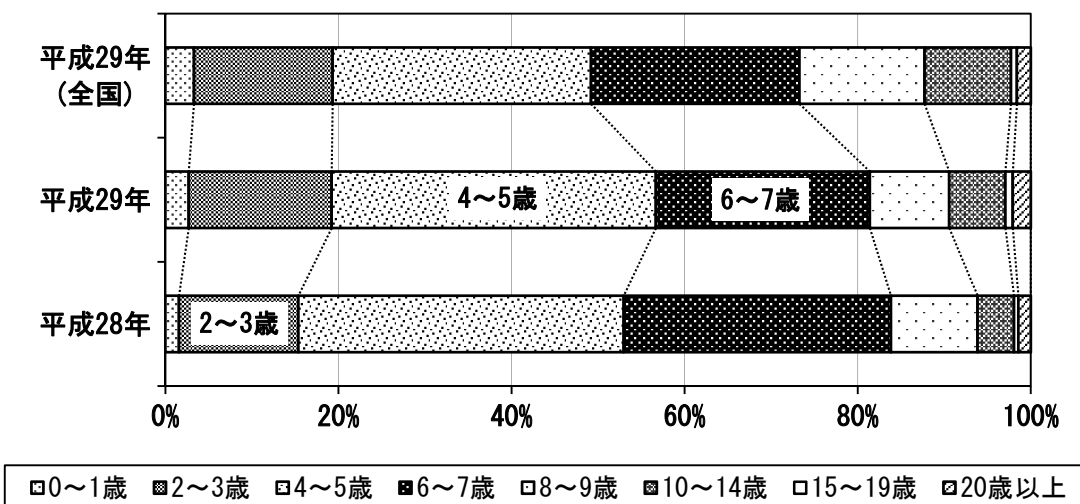
本疾患は年間を通して発生するが、晩冬から春にかけて増加するとされる。本年は、前年の流行を継続し年当初から3月下旬頃まで報告数のやや高い状態が続いた後、緩やかに減少した。また、45週(11月上旬)から年末にかけて、県内一部において地域流行も見られたが、季節的な特徴も見られず、年間を通して一定の範囲内(0.2～1.4件/定点)で推移した。

年齢層別報告数では、0歳から4歳まで年齢を重ねるとともに増加し、5歳以降は年齢とともに減少するとされている。本年も、1歳以下2.7%、2～3歳16.5%、4～5歳37.5%、6～7歳24.7%、8～9歳9.2%、10歳以上9.5%であり、4～7歳の幼児からの報告数が約62%を占めた。

流行性耳下腺炎の週別患者報告状況



流行性耳下腺炎の年齢層別報告数

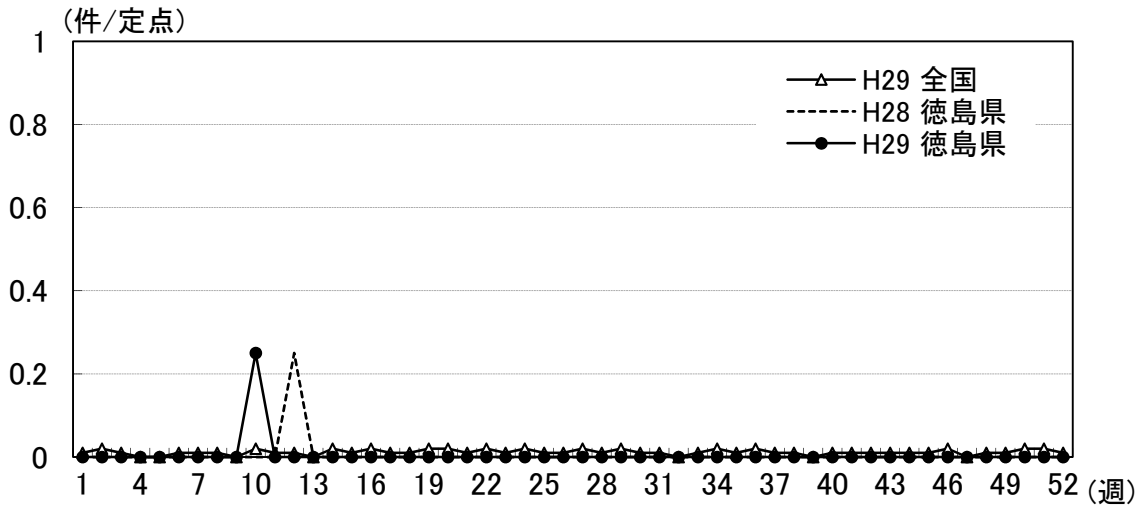


⑬ 急性出血性結膜炎

本疾患は局地的に流行することがあるが、流行のない年は季節性も見られず、報告数は低いまま微増微減を繰り返すとされる。

年間報告数は1件（40歳代）であった。過去5年間でも毎年0～1件で推移し、徳島県内での流行は見られていない。

急性出血性結膜炎の週別患者報告状況

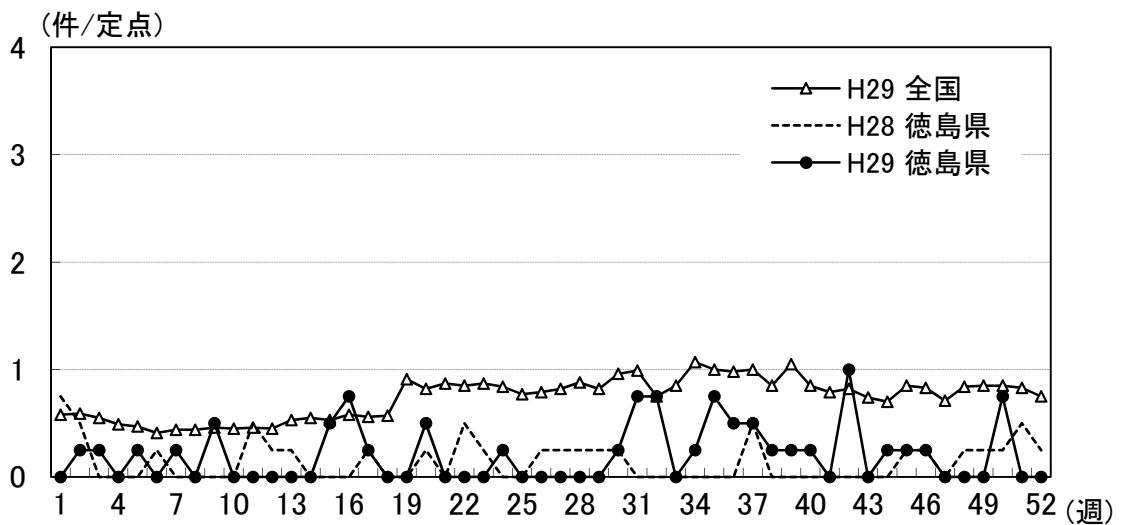


⑭ 流行性角結膜炎

年間報告数は43件と前年（30件）からやや増加したが、季節的な変化は見られず、年間を通して1.0件/定点以下の低値で推移した。

年齢層別報告数では、10歳未満18.7%、10歳代4.7%、20歳代11.6%、30歳代27.9%、40歳代16.3%、50歳代7.0%、60歳以上13.9%と幅広い年齢層から報告された。

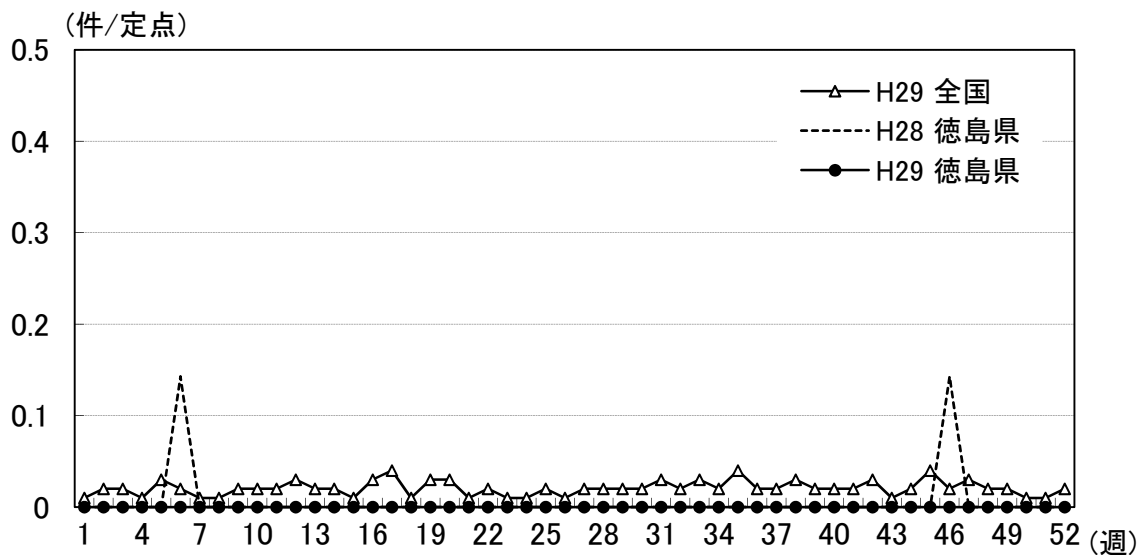
流行性角結膜炎の週別患者報告状況



⑮ 細菌性髄膜炎

本年は報告が見られなかった。過去5年間では、毎年1~3件で推移している。

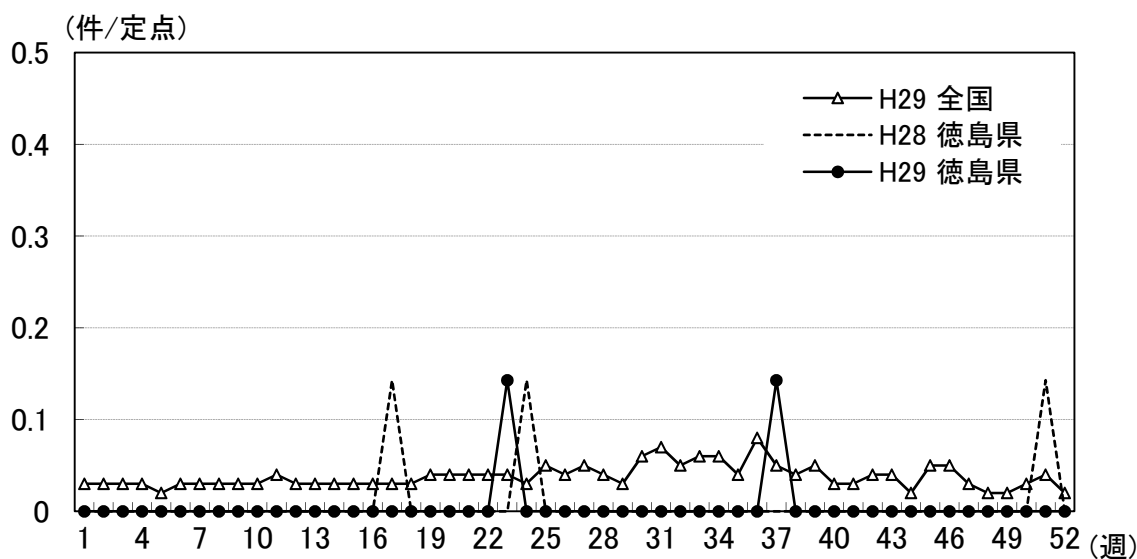
細菌性髄膜炎の週別患者報告状況



⑯ 無菌性髄膜炎

年間報告数は2件（10歳代、20歳代）であり、過去5年間では毎年1~9件で推移している。病原体は1件からマイコプラズマが検出されている。

無菌性髄膜炎の週別患者報告状況



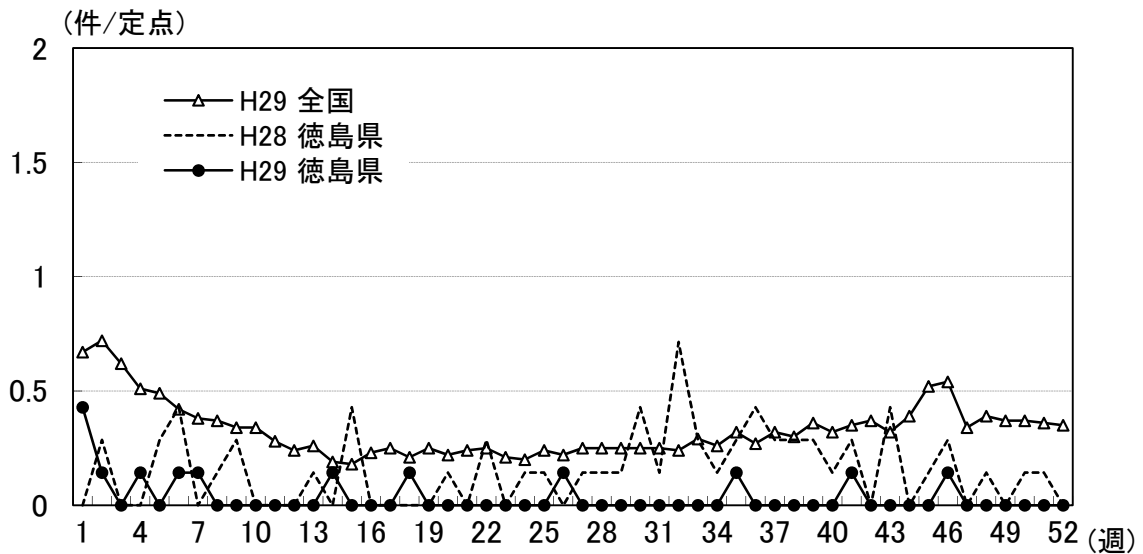
⑰ マイコプラズマ肺炎

年間報告数は13件と、前年(57件)から減少した。過去5年間では、年間13～57件で推移している。

本疾患は年間を通して発生するが、秋から冬にかけて多くなるとされる。本年も季節的な特徴は見られず、年間を通して0～0.43件/定点の低値で推移した。

年齢層別報告数では、幼児から成人まで報告されるが、学童期、青年期に多いとされる。5歳未満38.5%、5～9歳23.1%、20歳以上38.5%と幅広い年齢層から報告されたものの、10歳代からの報告はなく、学童期を含む10歳未満からの報告数(約62%)が他の年齢層に比べ多かった。

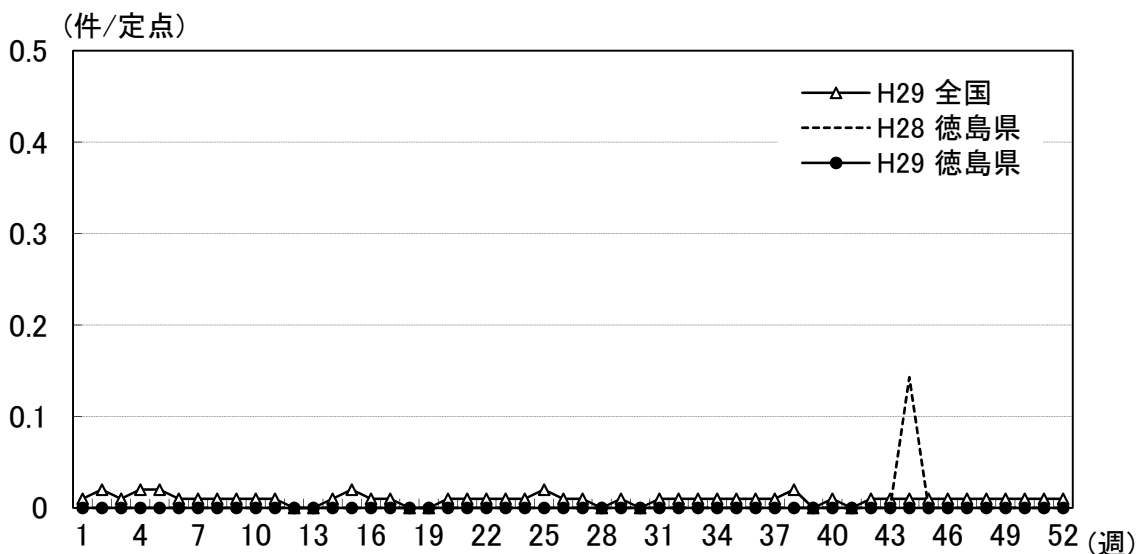
マイコプラズマ肺炎の週別患者報告状況



⑱ クラミジア肺炎

本年は報告が見られなかった。過去5年間では、毎年0～3件で推移している。

クラミジア肺炎の週別患者報告状況



⑱ 感染性胃腸炎（ロタウイルス）

年間報告数は12件と、前年（58件）から減少した。例年、年当初から春先にかけて多く報告され、夏季は減少するなど、季節的な特徴も見られたが、本年は年間を通して0～0.29件/定点の低値で推移した。

年齢層別報告数は、5歳未満50.0%、5～9歳50.0%であった。

感染性胃腸炎（ロタウイルス）の週別患者報告状況

